

書道用語一覽



●内の数字は、本文の主な掲載ページを示す。

あ行

いん「印」⁸⁶

石や木などの用材に文字を刻したもの。印章。

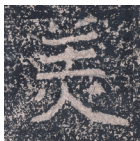
うんぴつ「運筆」⁴

字を書くときの、筆の運び方の総称。

えんせい「円勢」

「鄭義下碑」などに見られる丸みを帯びた字形。

⇩ **方勢**



鄭義下碑

か行

かいし「懐紙」

懐に入れておき、必要に応じて漢詩や和歌、手紙などを書きつける用紙。半分にしたものや半懐紙という。

かいしょ「楷書」⁶

漢字の書体の一つ。五書体の中で最後に成立した。一つ一つの点画が独立しており、現代では最も標準的な書体。

がごう「雅号」

書家などが、本名以外に用いる名前。

かごじ「籠字」⁹⁰

手本から文字の輪郭だけを写し取ったもの。

がせんし「画仙紙」

書画に用いる大判の用紙。

た行

だいてん「大篆」¹²

篆書体の一つ。小篆の成立以前に、統一前の秦で使われていた。籀文ともいう。

たくほん「拓本」³⁶

石や金属に刻されたり鑄込まれた文字や文様を、墨などを用いて紙に写し取ったもの。

ちらしがき「散らし書き」²

空間美を意識し、書きだしの位置や行の長さ、行間などに変化をつける、仮名特有の構成法。

でん「伝」

古来伝称されている筆者名を意味する。仮名の古筆など、筆者が明確でないものに多くつけられている。(例)「伝紀貫之」

てんかく「点画」⁶

文字を構成する点と線のこと。漢字の書に用いられることが多い。

てんこく「篆刻」⁸⁶

主に篆書を用いて石などに文字を刻し、印を作ること。書道の一分野。

てんしょ「篆書」⁶

漢字の書体の一つ。甲骨文、金文、小篆など、隷書が生まれるまでの文字の総称として用いる。

てんせつ「転折」¹³

直角に近い形で点画の方向を転換した部分の言い方。

とうのしたいか「唐の四大家」

欧阳詢・虞世南・褚遂良・顔真卿のこと。唐代に楷書の書法を完成させた。

からよう「唐様」

中国風の書。主に江戸時代に流行した、宋・元・明代の影響を受けた書風をさす。⇩ **和様**

きごう「揮毫」

「筆を揮う」の意。筆で書画などをかくこと。

きひつ「起筆」¹³・³⁴

点画の書き始めの部分。始筆ともいう。

ぎようしよ「行書」⁴

漢字の書体の一つ。隷書の速写体として生まれた。読みやすく速く書けるので、実用書体として現代でも広く使われている。

され「切」

卷子本や冊子本などに書かれていた古筆が、鑑賞用に分断されたもの。断簡。(例)「高野切」

さんぶん「金文」¹²

主に殷・周時代に作られた青銅器などの金属器に、鑄込まれたり刻まれたりした文字。

こうこつぶん「甲骨文」¹²

亀の甲羅や獣の骨に刻まれた文字。現存する最古の漢字と考えられる。

こうせい「向勢」

向かい合う縦画が外側に膨らむように書かれた楷書の字形。⇩ **背勢**



顔氏家廟碑

こくじ「刻字」⁹¹

木や石などの用材に筆意を踏まえて文字を刻す表現のこと。書道の一分野。

な行

のうしよ「能書」⁶

文字を書く技が優れている人のこと。

は行

はいせい「背勢」⁴²

向かい合う縦画が内側に反るように書かれた楷書の字形。⇩ **向勢**



九成宮醴泉銘

はいれつ「配列」

用紙に対して字間・行間、行の中心、上下左右の余白などを考え、文字を適切に並べること。

はたく「波磔」²⁰

隷書において、横画の収筆を右に大きくうねらせて払い出す書き方、および右払い。

はつぶん「八分」²¹

隷書体の一つ。波磔をもつ、装飾的な書体。漢代に生まれた。

ひつい「筆意」

用筆に込められた書き手の意図や心情。

ひつみやく「筆脈」²⁹・⁵⁴

点画の一つ一つが、気持ちのうえで、また形のうえでもつながりをもつこと。

ふうしゅ「風趣」

書においては、書き手の思いや表現、素材によってさまざまな生まれる趣のこと。

ぶんぼうしほう「文房四宝」

筆・紙・墨・硯のこと。詩文や書画をかくときに最も重要とされた文房具。

こてん「古典」²

書道では、古人の優れた筆跡を指す。書道の学習の手本となるもの。

こひつ「古筆」²

日本の古人の優れた筆跡。平安時代に書かれた仮名の書をいうことが多い。

さ行

さんせき「三跡」³²

小野道風・藤原佐理・藤原行成のこと。日本的な書風(和様)を確立した。

さんびつ「三筆」

空海・嵯峨天皇・橘逸勢のこと。中国の書法を基盤としつつも、日本的な個性の感じられる書風を生み出した。

しきし「色紙」

詩文や和歌を書くための方形の用紙。

しゅうじ「集字」³⁴

さまざまな筆跡から目的に応じて必要な文字を集めること。

しゅうひつ「収筆」⁵⁴

点画の書き終わりの部分。終筆ともいう。

じゅんかつ「潤渴」³⁹

墨のにじみとがすれ。

しょうてん「小篆」¹²

篆書体の一つ。秦の始皇帝の文字統一によって制定された書体。左右相称で縦長の字形が特徴。

へんたいがな「変体仮名」

現在使われている平仮名とは字源が違う仮名や、字源は同じでも形が大きく異なる仮名。

ほうしよ「倣書」

古典の筆法や書風を理解し、その技法を用いて他の文字を書くこと。創作への足がかりとなる学習方法の一つ。

ほうじよう「法帖」

拓本を、臨書の手本や鑑賞のために本の形(剪装本)に仕立てたもの。

ほうせい「方勢」

「牛橛造像記」などに見られる角張った字形。

⇩ **円勢**



牛橛造像記

ま行

まんようがな「万葉仮名」

日本語を、漢字の音を借りて表記した文字。「万葉集」が成立した奈良時代に多用された。

もっかん「木簡」

文字を書きつけるための素材として用いられた木の札。紙が実用化するまで、日本や中国で盛んに用いられた。

や行

ようひつ「用筆」¹⁷

筆の使い方のこと。起筆・送筆・収筆での筆の扱い方や穂先の動かし方など、その内容は幅広い。

じようふく「条幅」

全紙(約70cm×約135cm)を縦長に切った用紙を軸装したものの。

しよたい「書体」⁹

文字の様式のこと。漢字には、篆書、隷書、草書、行書、楷書の五書体がある。

しよふう「書風」³

書き手によってさまざまな生じる書の趣のこと。書きぶり。

しよほう「書法」⁴

文字を書く方法の総称。執筆法、運筆法、用筆法など。

しんせき「真跡」

その人物が実際に書いた書画のこと。真筆ともいう。

せきひ「石碑」¹⁵

後世に伝えるために、銘文を石に刻して建立したもの。

そうしよ「草書」⁶

漢字の書体の一つ。篆書や隷書の速写体として生まれた。点画を最も簡略化した実用書体で、仮名の母体となった。

そうひつ「送筆」¹³

点画の起筆と収筆の中間の部分。

ぞうほう「蔵鋒」¹³

起筆における用筆法の一つ。穂先を、点画の中に包み込むように運筆する。⇩ **露鋒**

ら行

らっかん「落款」

書画に署名を入れ、印を押すこと。署名の後に「書」「かく」などと記すのが一般的で、季節や年月日などを加えることもある。

りようし「料紙」⁶³

仮名の書に多く用いられる、表面に加工や装飾を施した用紙のこと。

りんしよ「臨書」⁹

古典や古筆を手本にして書き、その技法を学ぶこと。書道の学習法で最も多く行われている。

れいしよ「隷書」⁶

漢字の書体の一つ。篆書を簡略化し、速書きする中で生まれた。うねるような運筆リズム(波勢)と、払い出す用筆(波磔)が特徴。

れんめん「連綿」⁵⁴

漢字の行書・草書や仮名の書で、二文字以上をつなげて書くこと。

ろほう「露鋒」

起筆における用筆法の一つ。穂先が点画の端に表れるように運筆する。

⇩ **蔵鋒**

わ行

わよう「和様」

優雅で流麗な日本風の書。小野道風・藤原佐理・藤原行成ら三跡によって確立された。⇩ **唐様**

